Kitazono
Pharmacies

あなたと一緒に成長していきたい

『薬剤師って何をしているの？』
『薬局で薬を渡しているだけでしょ？』
『薬をもらうだけなら、病院でもらう方が手間も省けて楽だし薬局って要らないんじゃない？』

そんな厳しい声がいろいろなところで言われていることは知っている。
“本当に薬局薬剤師って必要ないのか？”
“・・・でも本当にそうなのだろうか？”

阪神大震災、東日本大震災、未曾有の大震災の際には、被災地で多くの薬剤師が活躍した。
オリンピックを控え、アンチドーピングにも本気で向き合っている薬剤師もいる。
地域に根ざし、地域の住民のために走り回っている薬剤師もいる。

時代の変化に合わせて薬剤師の在り方も変化し、薬剤師自身も成長している。
だからこそ薬剤師の可能性は広く、今後も狭まることはないだろう。
我々が自分たち自身で成長することをやめない限り、我々の仕事は無限大に広がるだろう。

目の前で困っている患者さんがいたら・・・
耳を傾け、患者さんと共に成長し、
患者さんを支える他の職種の方と協力し合い、
周りにいる仲間たちと共に高め合い成長していく。

薬剤師の未来は、我々自身の在り方次第である。
同じ想いを抱き、共に成長していける仲間が増えれば、
薬剤師の未来は明るいのではないだろうか。

薬剤師免許を手に入れることが
ゴールだと思っていた

国家試験に合格し白衣を着て現場に立った。
国家試験に受かれば薬剤師になれると思っていた。
先輩たちと同じようにすぐに服薬指導もできたことから同じ薬剤師になれたと思っていた。

しかし、ある日、患者さんに言われた。
『君のような若い薬剤師は不安だから、もっと経験ある人から薬を渡して欲しい。
自分の健康のことをあなたには任せたくはない。』
ショックだった・・・

先輩たちと同じ白衣を着て、名札にも薬剤師と書かれている。
見た目は確かに薬剤師だ。
しかし、患者さんから見ると、自分はまだ薬剤師になれていなかった・・・

本当の意味での薬剤師になろうと決めた。

厳しく叱ってくれる環境がある

日々の業務を慌ただしくこなしていく。
いつものように粉薬の計量混合を行っている。

そんな時だ！
先輩から『その薬は本当にその量で大丈夫？きちんと調べた？』と質問があった。
「たぶん大丈夫だろう・・・。」と思ったが、きちんと調べずに調剤していた。
また、先輩の問いにもすぐに答えられなかった。
・・・怠ってしまっていたからだ。

「忙しかったので、つい・・・。」は言い訳にはできない。
人の命を預かる医療の現場で手抜きは許されない。

私が仕事に慣れてきたことで、自分に生まれた甘えに先輩は気づいていたのだ。
見て見ぬふりではなく、その場で叱ってくれた。

・・・ありがたい。

患者さんと一緒に
自分も成長している

投薬に行くようになってまだ間もないころだ。
お母さんに抱っこされている子が赤い顔で鼻水を垂らしている。
お母さんは心配そうに、初めて薬を飲ませるので不安だと言った。
「粉薬は水に溶かして機嫌が良いときに飲ませればいいですよ。」と言って薬を渡す自分がいた。
不安がるお母さんに対してそれだけで良かったのだろうか・・・

それから数年が経った。
あの時、心配そうにお母さんに抱っこされ鼻水を垂らしていた子が、
今では、『苦い抗生剤も自分でちゃんと飲めるようになったよ。』
と鼻水を垂らしながらも得意顔で私に報告してくる。
あの子も成長したんだなと思った。
「今では色々な薬の飲み方をアドバイスできるようになったよ。」と私も言いたかった。

患者さんに育てられていく

ある薬を飲んだことがきっかけで、
日常的に手が震え、言葉もスムーズに話せなくなった患者さんがいた。
いつごろからか分からないが、気がつくと私はいつもその方の投薬に行っていた。

薬に対する不信感を抱き、不安そうにしながらも血液検査の結果などを相談してきてくれる。
相談内容も予想外なことが多い。
少しでもその患者さんの不安を和らげたいと思い、色々と本で調べたり勉強をした。
学生のころはあまり勉強を進んでするほうではなかった。
というよりも、むしろ嫌いだった。

今は進んで勉強をするようにしている。
目の前に問題を抱えている患者さんがいるからだ。
誰かのために全力を尽くすことは、想像以上に自分を成長させる。

患者さんは
あなたに会いに来ている

毎日、待合は患者さんで溢れている。
我々はとにかく早く！正確に！と機械的な業務になっていたのだろう。
それでは、患者さんの求める健康をサポートできるはずがない。
頭では分かっているが、目の前の状況がそうはさせてくれない。
・・・でも言い訳だと自分自身が一番理解している。

そんなある日のことだ。
ずっと待合に座られていたおばあさんが、
『いつもここは混んでいるねえ。
　でも、いつ来てもここの人は優しいから、待つけどつい来てしまう。』

今まで患者さんからの言葉にどれほど救われただろうか。
温かい患者さんからの言葉が、いつも我々を初心に帰らせてくれる。

我々が患者さんにきちんと向き合えば、患者さんに思いは伝わるのだ。
“我々にとっては数十人の中の一人の患者さんでも、患者さんにとっては一人の薬剤師であること”
を決して忘れてはいけない。

社会人になったかなあ

投薬に行きカウンターで患者さんの名前を呼んだ。
自分に近づいてくる人は、中学生時代にお世話になった国語の先生だ。
腎機能が悪いのか、何種類も薬を飲んでいる。

1ヵ月後、次の受診日の予定だったが、その先生は来なかった。
数日経ったころに先生はやってきた。
「先生、予定より受診が遅かったみたいだけど、どうしたの？」、
『給食の後に飲む薬をつい忘れて、薬が余っていたから受診しなかったんだ。』
と先生は恥ずかしそうに言った。

中学生時代は、怖い顔でよくその先生に怒られていた。
でも今は笑いながら僕が先生を怒っている。
先生は怒られているのにどこか照れている。

先生、私も先生みたいにきちんと社会人になれたかなあ。

患者さんと向き合う

私のことを信頼してくれているのか、
全ての医療機関の処方箋をわざわざ持ってきてくれる患者さんがいる。

ある日のことだ、
『最近、腕にあざのようなものがよくできるんだ。
　先生には言ってないんだけど、あんたには相談してみようと思って。』
直ぐに抗血栓薬の副作用だと分かった。

私は「副作用かもしれません。すぐに先生に確認します。」と言ったが、
その方は『先生には言わないでくれ。』と首を縦に振らなかった。
“言わないでくれと言われたから、医師に言わなくていいのか？”
“患者さんからの頼みだから仕方がない・・・？”

私はすぐに先生に連絡をした。患者さんからの頼みを断って。
薬はすぐに休薬になった。

その方はしばらく来られなかった。
やはり怒っているのだろうか・・・。

しかし、突然その方はまたやってきた。
『ありがとう。やっぱりあんたから薬をもらいたいわ。』

薬を渡すだけが投薬ではない

月１回は必ず薬局に来るおばあさんがいる。
毎回、少しだけ薬とは違う話もしていたが、特に気になることもなかった。
ある日、いつものように来られたおばあさんは、
血糖値が少し上がっていたが、なぜか嬉しそうだった。
「血糖値が急に上がっているけど、嬉しそうですね。どうしたんですか？」と聞くと
『夏休みに孫や娘が帰ってきたので、嬉しくていっぱい美味しいものを食べてしまったんだ』
とおばあさんはやはり嬉しそうに答えました。
初めて知ったが、おばあさんの子供たちも家を出て行き、今は一人暮らしをしているそうだ。
『話す相手もそんなにいないし、ご飯も一人だから美味しくない。』と・・・
おばあさんは、ただ話し相手を求めていたのだ。
薬局でたいした話をするわけではないが、
『話をすることが楽しい。』とおばあさんは言ってくれた。

それからは薬と関係のないこともしっかり話すようになった。
薬の話ばかりしていた時より、おばあさんは満足そうに帰っていくことが増えた。
薬局は薬を渡すことが、主な仕事かもしれない。
・・・でも来る人によって求めているものは違う。

仲間と高め合う

きたぞの薬局は定期的に社内ミーティングを行なっている。
そこでは、年齢・社歴なども関係ない。

思っていること、こうしたらもっと良くなるんじゃないか、
ということを立場は関係なくぶつけ合っている。

気になることがあれば、後輩にだって聞き、疑問点を無くす。
それが患者さんにとって良いことだと分かっているから。

本気で話し合ったことだから、
みんな納得もするし、同じ想いで一緒に進んでいける。

“あなたもこの輪に入ってみたくはないですか？”

薬剤師

長期実習・・・、現場に出てからも・・・、疑義照会や医師と一緒に開催する勉強会・・・、
ずっとずっと思っていたことがある。
「薬剤師は、どうしてこんなに医師に気を遣いながら働いているんだろう。」
・・・と言っている自分も医師に気を遣いながら言いたいことを言えずにいる薬剤師の一人だ。

薬剤師は、自分の職能に誇りをもっていないからなのか？
医師よりも劣っている職業だと自分たちで思っているからなのか？

薬学部が 6 年制になって、10 年以上が経過した。
そろそろ医師と対等に話のできる薬剤師がいたるところで現れてきているはずだ。

きたぞの薬局の薬剤師はまだまだだ。
でもみんな変えていきたいと思っている。
一人では変えられない。
一緒に変えていく仲間がもっと必要だ。

我々は一緒に変えていける仲間を待っています。